

# 京都 大学 大学案内

KYOTO UNIVERSITY  
GUIDE BOOK 2012

知と自由への誘い

*Invitation to wisdom and freedom*



# 知と自由への誘い

京都大学 大学案内 2012

## INDEX

- 1 総長メッセージ
- 2 対談「京都大学で学ぶ」

### 京都大学の教育

- 6 京都大学の教育システム
- 8 京都大学の教養教育を担う「全学共通科目」
- 11 活力ある教育の場の形成と、環境の充実を目指して
- 12 ポケット・ゼミ

### 教育を支える施設

- 24 学術情報メディアセンター
- 26 図書館

### さらなる飛躍を支援

- 28 国際交流
- 30 大学院進学
- 33 就職支援
- 36 ベンチャー起業

### 学生生活サポート

- 38 学生生活を支援する制度や施設
- 44 クラス・サークル活動

### 学部紹介

- 48 総合人間学部
- 52 文学部
- 56 教育学部
- 60 法学部
- 64 経済学部
- 68 理学部
- 72 医学部
- 78 薬学部
- 82 工学部
- 86 農学部
- 90 教員の研究テーマ

### 京都大学のすがた

- 112 Voices
- 116 京都大学について
- 117 京都大学オープンキャンパス

### 入試関連資料・データ

- 118 入学者選抜実施状況について／合格者 最高点・最低点／出身高校等所在地別 志願者・入学者数
- 122 多様な入学制度／お問い合わせ先一覧／入学者選抜要項・学生募集要項の請求方法
- 124 キャンパスマップ・交通案内

## 京都大学の基本理念（抜粋）

京都大学は、創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多角的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基礎に、ここに基本理念を定める。

### 教育

京都大学は、多様かつ調和のとれた教育体系のもと、対話を根幹として自学自習を促し、卓越した知の継承と創造的精神の涵養につとめる。

京都大学は、教養が豊かで人間性が高く責任を重んじ、地球社会の調和ある共存に寄与する、優れた研究者と高度の専門能力をもつ人材を育成する。

(平成 13 年 12 月 4 日制定)

## 京都大学アドミッション・ポリシー

京都大学は、古都の文化を育んできた京都の地に創設された国立の総合大学として、社会の各方面で活躍する人材を数多く養成してきました。創立から 1 世紀以上を経た 21 世紀の今日も、建学以来の「自由の学風」と学術の伝統を大切にしながら、教育、研究活動をおこなっています。

京都大学は、教育に関する基本理念として「対話を根幹とした自学自習」を掲げています。京都大学の目指す教育は、学生が教員から高度の知識や技術を習得しつつ、同時に周囲の多くの人々とともに研鑽を積みながら、主体的に学問を深めることができるように教養をすることです。なぜなら、自らの努力で得た知見こそが、次の学術展開につながる大きな力となるからです。このため、京都大学は、学生諸君に、大学に集う教職員、学生、留学生など多くの人々との交流を通じて、自ら学び、自ら幅広く課題を探索し、解決への道を切り拓く能力を養うことを期待するとともに、その努力を強く支援します。このような方針のもと、優れた学知を継承し創造的な精神を養い育てる教育を実践するため、自ら積極的に取り組む主体性をもった人を求めています。

京都大学は、その高度で独創的な研究により世界によく知られています。そうした研究は共通して、多様な世界観・自然観・人間観に基づき、自由な発想から生まれたものであると同時に、学問の基礎を大切に研究、ないし基礎そのものを極める研究であります。優れた研究は必ず確固たる基礎的学識の上に成り立っています。そのため、入学を希望する諸君に京都大学が望むのは、まずは高等学校までの各教科・科目をしっかりと習得しておくことです。そのようにして身につけられた基礎的な学力があってはじめて、入学者は、京都大学が理念として掲げる「自学自習」の教育を通じ、自らの自由な発想を生かしたより高度な勉強へと進むことが可能となります。

京都大学では、各学部がその理念と教育目的に応じ、入学者選抜試験における教科・科目を設定しており、明確な目的意識をもった人の入学を求めています。新たな勉強のために必要な基礎的学力を十分に備え、大学の学風と理念を理解して、意欲と主体性をもって勉強に励むことのできる人を、京都大学は国内外から広く受け入れます。

# 地球社会の共存に 貢献せんとする 高い志をもつみなさんへ



京都大学総長  
松本 紘

本年度で創立114年を迎える京都大学は日本を代表する総合大学として10学部に加え充実した大学院や全国一を誇る研究所群も擁しています。また、「対話を根幹とする自学自習」を尊重する特色のある世界最高水準の大学教育を提供しています。これまで累計で188,202名の卒業生を世に送り出し、多くの卒業生が学術分野のみならず、産業界、官界など様々な分野で大いに活躍しています。

みなさんが京都大学で学ぶことはなにもものにもかえがたい経験となるはずです。みなさんは行政・政治・経済の中心から一定の距離をおく京都に暮らし、学生生活をおくります。世界都市・京都の内懐に抱かれ、千年以上続いた日本の文化や伝統を肌で感じつつ、それを革新していく姿勢を京都の地で学ぶことになるのです。古典から現代先端技術にいたるまでの幅広い知識を身につけ、大局的にものを見、自由に発想できるようになるためには、旺盛な知識欲を満足させる優れた教育環境と学んだことを我が物とする沈潜の時が必要です。現に各界で活躍する卒業生は、京都

大学で学んだからこそ、学問を通じて、学問の源流や本来あるべき人間社会の姿というものに思いをはせつつ、確固たる人生の礎を築くことができたことと異口同音に語っています。

京都大学においては、人文学、社会科学、自然科学の各分野で様々な独創的な研究がなされています。本学の研究の多様性とユニークさは群を抜いており、霊長類研究やiPS細胞研究などはその一端を示すものにすぎません。京都大学においては1年生からの少人数ゼミ「ポケットゼミ」を通じ、独創的な研究を行っている研究者から最先端の研究の手ほどきを受けることができます。

人間は地球上の小さな存在ながら、その行いが地球全体の様相を変える可能性を秘めた存在です。その可能性と責任を胸に、将来世界的なリーダーとして地球社会の共存に貢献したいという高い志を持つみなさん。自由で知的刺激にあふれた大学、京都大学はみなさんの未来の飛翔のための翼を与える大学でありたいと総長として願っています。



京都大学の初代総長木下廣次は、履修科目の選択肢を広げるなど、学生の自立性を尊重した教育方針を採用したことで知られている。京都大学創立後最初の入学宣誓式において、木下は「大学学生に在りては自重自敬を旨とし以て自立独立を期せざるべからず」と述べている。



# 対談「京都大学で学ぶということ」

## 京都大学で学ぶ ～教育・研究成果の社会還元～

最先端の学術研究を深化させていく一方、近年においてはその成果を社会にどう役立てていくかという点においても、京都大学にはますます大きな期待が寄せられています。「知」の社会還元という役割をふまえ、そのためにどんな教育やシステムが必要なのか。あるいは社会に役立つ学問とはどのようなものなのか。京都大学理事・淡路副学長を囲んで、教授や学生の皆さんと共に考えます。

## 理学と文学の視点から見た、社会への還元

森脇：昨今大学は研究の成果を社会に発信していくことが求められています。しかしすべての学問がすぐに社会に役立つというわけではありません。今日は理学と文学の分野からお二人の先生をお招きし、社会への還元という視点でご意見をいただきたいと思います。また学生さんにとっては、京都大学の場合1人あたりの教育費が年平均約200万、4年間で約800万、学部によってはそれ以上かかることもあります。ですから皆さんが京都大学で得たことを社会へ出てどう還元していくかを今日は考えていただきたいと思います。まず山極先生、理学研究科では社会への発信を司る部署「社会連携室」をもっと発展させていこうという動きが出ていますね。

山極：理学、文学というのはこれまで産業界ともあまり連携せず、社会への貢献が見えにくいと言われてきた分野です。ただサイエンスというのは、自然や人間、世界の姿をとらえ、見方を考える学問なので哲学と非常

### ゲスト：

|                  |                  |
|------------------|------------------|
| 京都大学理事（教育担当）・副学長 | 淡路 敏之（あわじ としゆき）  |
| 京都大学理学研究科 教授     | 山極 壽一（やまぎわ じゅいち） |
| 京都大学文学研究科 教授     | 氣多 雅子（けた まさこ）    |
| 京都大学経済学部 4回生     | 森田 悠加（もりた ゆか）    |
| 京都大学理学部 4回生      | 青木 翔吾（あおき しょうご）  |

### 司会進行：

|               |                |
|---------------|----------------|
| 京都大学理事補（教育担当） | 森脇 淳（もりわき あつし） |
|---------------|----------------|

に近い。その考え方を世に出して問う際、論文というやり方だけでは社会への発信が十分ではありません。そこで理学部では「社会連携室」を発足させ、さらに理学部の中で培ったさまざまな考え方をどのような形で世の役に立つのかを試してもらおう「学術推進部」も作ろうとしています。人類学では人間の由来、人間の成り立ちを生物学的に捉え、“人間力”なるものを相対的に把握しようとしています。今グローバリズムが蔓延していますが、多文化共生のためには文化の由来ではなく、人間の由来から捉える必要があります。人間という生き物を解き明かした上で、より良い方向性を理学の立場から発想し提案する。日本は「科学は技術である」という考え方が強い。しかしすぐに産業に役立つものでなくとも、科学は哲学のように世界観を提案できます。理学研究科ではそういうことを具体的にやっていきたいと思っています。

氣多：確かに哲学と理学は近いと思います。文学部は時間的な限定を超えたところでさまざまな人間の営みを考える学問で、もっと長いスパンで社会への還元を考える必要があります。それをどれだけ根源的に考えられるか追求するのが哲学です。東日本大震災では自然というものが恐るべきもので、人間の予測を超える本質があることを改めて思い知らされました。しかし現代文明の中では自然との向き合い方が組み込まれておらず、自然は人間の意のままに操作し得るという見方になっていきます。原発問題はまさに現代文明と自然との関わり方を根本的に提議して

いて、それが危機的な状況で表れています。科学技術文明が展開される中、人間がこの世界と関わって生きる意味をどのように実現していくのか。そういう根本的な問いを哲学は追求してきましたが、現代社会ではそれらの問いに対する需要力がなくなっており、哲学研究者も発信の仕方を十分工夫してこなかったという反省があるように思います。

淡路：お二人の先生は人と地球と自然の関わり方が大事だとおっしゃいましたが、それがうまくつながっていない。2002年から文部科学省が始めた「人・地球・自然共生プロジェクト(RR2002)」に見られるように、人、地球、自然、それぞれをつないで全体を見渡す視点が今必要になっています。ですから京都大学の学生には学問分野を束ねる力を身に着けていただきたいと思っています。個々に知っていても束ねる力がなければ融合力、総合力を発揮できない。理学も文学も、先生方が社会への出口を意識されたら、社会で役立つたくさんの有益な成果をお持ちだと思います。山極先生が人類学も人間学もおっしゃっていましたが、科学論文だけでなくサイエンスコミュニケーターのようなものを通して社会の理解を促すことができれば、大きな力になると思います。

山極：まさに日本はサイエンスコミュニケーターが不足しています。

淡路：「知」を社会に対してマネージしていく人の育成は日本では不十分で不足しています。これらは教育においても重要なことで、先端化・高度化することも必要ですが、それらを束ねて世の中にこういうものだと知らせていく能力も重要です。アメリカを見習って、そういう教養教育が一回生からできるといいですね。京都大学が進める模型の教育とはそういうもので、専門と教養教育がうまくバインディングできることが大切だと思っています。

森脇：大学には実務的なことに近い学問がある一方、世の中に役立つまでに長い時間を要する学問があります。

淡路：理学も文学も50年、100年という長期にわたって動くエンジンで、長きにわたる実学だと言えます。数学でも伊藤先生の伊藤の公式などは、ウォール街で最も役に立ったと言われるほどです。

森脇：数学も世の中からかけ離れたことをやっているように思われがちですが、意外と社会の役に立っています。例えばこの間米国防省がサイバーテロの脅威を語っていましたが、暗号などはサイバーテロから守るために今後国防に重要な役割を果たすようになります。数学者が単に知的興味としてやっていたことが、何百年経つと国防に役立つものになる。長いスパンで見ればこれも実学でなんですね。それでは学生さんの意見も聞いてみましょう。

## 社会に役立つ、イノベティブな学問

青木：私は地質学で鍾乳石を研究しています。鍾乳石は木の年輪のように毎年成長していくんですが、その一枚一枚を科学分析すると、過去の降水量の解明につながります。社会への還元という意味では、気候変動に関する政府間パネル「IPCC」の第四次報告、つまり温暖化対策などに貢献できると思います。

淡路：過去を知ることなしに未来を予測できるか、という点で、ある意味試金石ですね。地質学と地球物理をつなぐことによって新しい学問を拓こうという興味深いことをやっておられます。

青木：地質学もそれだけでは限られますが、地球物理などのさまざまな分野と共同研究することによって新たな可能性が広がります。例えば千年というスケールで研究すると、降水量のパターンが中国王朝の滅亡パターンと一致するという興味深い研究もあって、人類史などと組めばまた面白い成果が得られます。

山極：歴史としてしか語られなかったことが環境史として語られるようになる。これはとても面白いことで、現代の出来事、未来の出来事に新しい見方を提供します。人類学でも安定同位対比を用いると、人が何を食べていたか、どう移動したかなどを詳しく知ることができる。そうすると人間観や歴史観が変わり、新しい人間に対する見方を提供することで未来の構築の仕方も変わってきます。

淡路：京都大学では次の学問は作っていくもの、という考え方です。学んで何かをするだけでなく、さらに新しい創造につなげていく。イノベティブというのは本来そういうことだと思います。

森脇：理学的興味で考えたものは非常に自然な構造を持っているので、長い目で見れば皆さんの考え方と一致してきますよね。

淡路：理論物理や素粒子の研究者の言葉で印象的だったのは、膨大な式を解いていき、最後に間違っているか、間違っていないかの判断基準は美しいか、美しくないかということだという。

森脇：まさにその通りで美しいものは正しい。

氣多：現代の哲学においては真理の基準、真理論が根本的に覆されるようなところがあります。学問的な真理の基準、命題の言明の真理という非常に限定された仕方ではしか語れなくなっています。そういう共通の尺度で真理を語れなくなった時に、美しさの基準というのは最後に残った考え方です。共通の真理性についてどういう捉え方があり得るのか、ひとつの示唆を与えるものだと思います。



山極 壽一 教授 (理学研究科)

理学の視点から捉える人間力。こうした研究は東日本大震災のように人が0から始めなくてはいけない時、どんな未来を構築していけるのかを考える力になれます。



淡路 敏之 理事 (教育担当)・副学長

これからの京都大学の教育においては交流力が一層重要です。すなわち対話を根幹とした高いレベルの自学自習がこういうものだと実感できるよう、推進していきたい。



氣多 雅子 教授 (文学研究科)

英語が世界共通語となった今、語学力を鍛えることは求められますが、学問におけるオリジナリティというのは日本語で考えることによってこそ生まれます。

淡路：「何が美しいかという解釈は難しいですが。」

山極：みんながまとまった調和の美しさを大切にしてきたのが日本人の発想だと思う。経済優先の昨今は、個人の資産や能力が取りざたされる時代となり、調和を重んじる伝統的な日本人の考え方からはかけ離れているなどという気がします。経済学部の森田さんはどんな研究をされているのですか。

森田：私は経営専攻で、経営戦略、中でも日本企業の海外進出や、日本の研究機関が海外に対してどういう競争力を持っていくかなどを研究してきました。海外の考え方を学ぶためにカナダの大学で1年間経営学を勉強しました。

山極：海外と日本ではどのように違うの？

森田：日本の経営学は過去を学ぶことに重きが置かれます。ですからフレームワークや歴史が中心ですが、北米ではマーケティングリサーチや効果的なプレゼンテーションなど実学が中心。人に働きかけたり、自分の考えを発信する技術を勉強します。私は京都大学で両方学ぶことができてとてもよかったと思っています。

## 大学で学ぶテーマを見つけるために

山極：高校と大学では勉強は全然違っていて、高校の時は目標に向かって足りない知識をどう積み重ねていくか。それが受験で試されるからみんな必死で勉強する。つまり答がある。大学では自分のオリジナルな発想につながる答を探すこと、問いを作る能力が要求されます。するとどう勉強をいけばいいか悩む新生が出てくる。オリジナルな考えは周りに発信したり情報交換されてこそ世に問えるものになります。しかし発信せずに自分の中で閉じこもってしまうとオタクになる。そこをどう防ぐのかは大学側にも責任があると思っています。そのためにはベースの広さ、出口の多さが必要で、いろんな学問からの発想やさまざまな人間関係も必要です。

森田：大学では学部も幅広く、まず何をするかということから選ばなくてはいけなくて、私も一回生の時は悩みました。でもいろんな部門の先生方が相談に乗ってくださって、相談すれば目的に応じたプログラムを紹介してくれたり、海外の大学と一緒に選んでくださったり、求めればいくらかでも応えてくれる。だから自発的な学生にとっては非常に学びやすいと思います。

山極：京大は無放任主義を良しとしてきたので、教員の方から学生へ近づいていかない。それは我々も反省すべき点です。でも一旦近づいてきた学生には同志意識をもって熱心に協力するんです。

氣多：文学部でも「私はこれをしたい」と思わせるまでがむしろ大変。特に哲学関係は自分の問いを発見していくことが非常に大きなウエイトを占めるので、こちらから与えることはできない。こちらから働きかけていくと、どうしても既成の問いになってしまう。自分で発見することなしにこの分野の学問はできないので、京都大学の放任は問いを広げていくという意味では必要だと思います。

淡路：学生が大学に入ってくる状況が昔とは少し違う。だからやりたいことを見つけられるようガイドすることも今は必要だと思います。それは大学の教育力で、そのために点から出発するのではなく、ラインを作ってある程度の方向性を導いてやる。しかしある段階からは自分の道を作っていくことを求めます。そうしたシステムを構築しないと、入学後多くの学生が迷ってしまうかもしれません。

森脇：周囲の友達は自分たちが学びたいものをしっかり見つけられていますか？

森田：う〜ん、個々でギャップがあるでしょうね。一部の学生は自分のやりたいことを積極的に探して、京大が与えられる機会を有効活用しています。一方で何がしたいかわからないまま就職活動を迎える人もいます。

森脇：カナダで勉強して日本との違いを感じましたか？

森田：両学生とも一生懸命勉強しますが、それを見せるのが上手なのがカナダの学生。日本の学生は文化的な背景もあると思いますが、主張することを躊躇してしまう。でも個人的に話すと言論が盛り上がるので、それは勉強している証拠だと思います。

山極：以前NHKの番組「ようこそ先輩」で母校の小学生を教えたのですが、その時先生から生徒にはしゃべらせないでほしいと言われました。みんながいる前でしゃべるのは苦手なので、感想は書かせてほしいと。書かせるといいことを書くのですが、そんな教育をやっているのは日本人はしゃべれるようにはなりませんね。

## ディベートとディアローグ

淡路：欧米人は物事をシンプルに考えるという訓練がなされているから論文もスマートです。書くのが巧いのは頭の中でこなれる能力を持って



青木 翔吾 (理学部4回生)

将来予測のためには百年〜千年前の気候変動を知る必要があるとされていて、過去の1年毎の降水量解明につながる鍾乳石の研究が今注目されているんです。



森田 悠加 (経済学部4回生)

海外の経営学を勉強するために、京都大学から派遣されてカナダの大学で1年間経営学を勉強しましたが、京大で学んだことは海外でも高く評価されました。



森脇 淳 理事補 (教育担当)

京都大学で学ぶ、その背景には社会のために、人類のために貢献してほしいという国民の願いがあるということも学生の皆さんは少なからず意識して欲しいと思います。

いるから。そういう能力に加え、日本人はディベート力、つまり情報交換力を身につければもっと力を発揮できると思います。意見や情報を交換する力を京大では「対話」と言っていますが、これを重視すればものすごくいい教育ができます。

山極：私は東京出身ですが、東京はディベートで相手をとことんやっつける。その点議論を巧く引き出す関西のサロン文化は素晴らしい。京大もそのような文化の中心にあります。

淡路：京都大学の自学自習は、自己研鑽や自己演習を伴う高いレベルの自学自習です。ですから対話・情報交換を重視しながら高いステージで自学自習を実践し、自分なりの世界を見つけていってもらおう。そのメッセージを明確に打ち出していけば、もともと京大生はポテンシャルがあるのだから実行していけると思います。

氣多：ディベート力とディアログですね。ディベートは論争に勝って答えをだすことで、ディアログは相手と交換しながら自分がより良く変わっていくこと。日本文化にあるのはディアログの方で、だから相手をやりこめないで自分を振り返る。それはまた日本語の特質とも関係します。今は英語が世界の共通語になっていますが、他の言語で考えると思考のスタイルや内容も変わってきます。日本語で考えることが失われたら、日本の文化は滅びます。日本語で考えることはつまり、日本の土壌の中から思考するという。そういう中でしかオリジナリティというものは生まれてきません。

淡路：おっしゃる通りだと思います。

山極：京都大学は少人数教育を実践していて、3年生の時からゼミで実習をします。実習という場が、自分が見たもの感じたものを語り合う機会になる。互いに意見を交わしていくうちに磨かれ、自分が紡ぎだす生の言葉に目覚めていく。そのようなゼミで直接先生とふれあえる方が、京大的教育ができると思います。

淡路：そういう仕掛けをつくっていくことは大事ですね。先生方は研究者であり教育者でもあります。これからは教育やアドミニストレーティブな仕事にも力を割いていただく先生も必要になってきます。運営は教育を実行していく上で非常に大切で、そういう能力や仕事を実際に求められます。研究、教育、教育マネジメント、それぞれが機能しないと大学の運営は成り立ちません。

## 京都大学でどう学び、どう伸ばすのか。

山極：大学1年次と4年次で求められるもののギャップが大きすぎるのもなんとかしないといけないという気がします。

淡路：京都大学には既にポテンシャルの高い学生が集まるから、入学後どれくらい教育で伸ばすことができているのか、不明なところもあります。

森田：高校の時の偏差値とは違って、何を以て伸びているかですが、私は京大に入って既存の考えにどんなクリエイティブな疑いをかけられるようになるかという考え方を学んだ気がします。

淡路：それは大変ありがたい話ですが（笑）、一方では4年生になってもまだ偏差値的な考え方しかできない学生が昔に比べれば増えているように思います。

青木：結局大学というより自分のやる気の問題で、先生と対話するかどうか自分の貪欲さによるのではないのでしょうか。

淡路：京都大学に入学した学生には、エンジンをかけるためのイグニッションコイルなるものもいるわけで、1回でかからなければ2回3回とかけてやらないといけない。

青木：僕の周りはおもとからスターターがついている人ばかりでしたが（笑）

氣多：私は大学の授業をサービス業だと捉える学生がいることには驚きました。与えられることばかりを求めている限り、学問はできません。入学時からそんな考えを持つ学生をいかに気づかせるか。

淡路：考え方を变えて、学んでいくべきことに気づかせる。それは大学における教育力そのものです。私は以前、地球有体力学の授業で沢山板書していたら、学生から「大事なことは赤でくくって板書してください」と言われたことがあります。まるで予備校のような授業を望んでいる。そんな学生が一人や二人じゃないのです。

森脇：数学の授業で、演習問題の解答を求められることがあります。解答を作らない理由を説明してもなかなか理解してもらえない。

森田：それは教育だけではないと思います。出口市場である日本の労働市場自体が大学の勉強をあまり重視しないからだだと思います。

淡路：企業は専門を勉強した人を求めています。学力試験抜きに効率的に就職試験をやるよう、大学名で選別しがちです。

森田：就職活動をして感じたのは、大学名を重要視しますが、私の研究や考えよりも論理的な思考などが問われます。カナダの場合は専門に特化した就職先に行くので、大学でも皆専門を真剣に勉強します。日本はジェネラリストを求めるので、学生が専門は何でもいいのだと勘違いしてしまう。大学の4年間は社会へ出る前に楽しむモラトリアム時代と捉えるから勉強しない学生が多いのではないかと思います。ですから私はそんな大学生のモチベーションを変えたいと思って、戦略コンサルタントへの就職を決めました。労働市場に海外からの労働力を巻き込んで競争力を強化できれば、大学での専門の身に着け方も変わっていくのではないかと思ったんです。

山極：高度な教育の場を作るのは教員であり学生です。それを活用して学生自身がどう能力を伸ばしていくのかというスタンスでなければ京都大学の自学自習は成り立ちません。ディアログやディベートの中で互いの学力を高め、そんな英気に富んだ学生たちがいることで創造的な機運も生まれる。その気運が結局企業に入って面白いことをやってやろうというエネルギーにもつながっていくのだと思います。

淡路：今日お話に出たディアログは非常に大切なことです。ディアログの中で自分の世界に気づいていく教育、そしてシンプルな教育が、これからの京都大学で実現していければと思います。

森脇：最後にこれから受験する皆さんにメッセージをお願いします。

森田：京都大学は自分が求めれば機会はいくらでもあるし、それを支援する先生もたくさんいらっしゃいます。そんな環境を十分活かすという気持ちで入学していただきたいですね。

青木：京大は学生レベルで考え付くことは何でもできる。理学部はシャイな先生も多いので、学生の方から先生に積極的に関わっていけば面白いことができると思います。

森脇：皆さん、今日はどうもありがとうございました。

平成23年6月14日  
淡路理事室にて